
NARUTO妖忍伝 あやかしにんでん 百鬼殺しノ巻

XXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO妖忍伝 あやかしにんでん 百鬼殺しノ巻

【Nコード】

N9697X

【作者名】

XXX

【あらすじ】

これは……魔の生き物『妖魔』を狩る為人知れず戦う者たち『忍』と、忍でありながらその血肉の半分が妖魔である少年『うずまきナルト』の物語である……（これは大人気連載中のジャンプ漫画『NARUTO』にクレイモアのような妖魔ものの要素を取り入れた、完全パラル作品です。NARUTOのパラル作品が嫌いな方は閲覧しないことをオススメします）

ナンバー1 忍の少年

東洋にある世界の先進国 大和 には五つの大国
『火の国』 『風の国』 『水の国』 『雷の国』 『土の国』 が存在し、
この『五大国』のおかげで大和の繁栄は7000年前から現代に
至るまで続いている。

しかし時を遡ること7000年前。
この五大国を滅ぼさんと、異形なる魔性の生き物『妖魔』が
10億という軍勢で押し寄せて来た。

妖魔の軍勢を束ね率いるは『霸牙王・朱天堂璽 しゅてんどうじ』

2

彼の目的は人の世へ現界できない自分自身を現界させる為、
大和の地下に眠る霊脈の多大なる強大なチャクラを得ることだった。
しかし……10億もいた妖魔の軍勢は一匹の妖魔によって壊滅した。
その妖魔の名は『ミナト』、本来の姿は九つの尾を持つ妖狐である為
『九尾』という異名をもち、その強さは妖魔が蠢く世界『魔境』の
隅々にまで伝わっていた。

妖魔の軍勢を一匹残らず討ち滅ぼしたミナトは、
朱天堂璽と三日三晩も戦い続けた末。朱天堂璽を封印しその結果
大和を救った。

多くの人々に感謝され、多くの人々を救ったミナトは
どこかへと消え失せしまい、その行方を知る者はいない……………

木ノ葉の里……そこは火の国に存在し、人知れず魔なる存在
『妖魔』が他に比べ数が多く。里の影に隠れて生きている。

中には人を襲う者もあり、そういう輩は大抵
『あの男』によって討ち滅ぼされてしまう。

その名は『うずまきナルト』

表向きは便利屋を営んでいるが妖魔が絡んでいる
通称『怪奇の依頼』が舞い込んだ際には一本の大刀『狐月』を
振るい妖魔を狩りし者『忍』の素顔を曝け出す。

現在。彼は久々に舞い込んだ怪奇の依頼を受け、木の葉ノ里から
十数キロ離れた場所にある炭鉱場に赴いていた。

炭鉱場は休日でもなければ夜でもないのに人影の一つも見当たらず、
完全に無人と化している。そんな廃墟ではないのに廃墟同然の

炭鉱場を……ナルトは涼しい顔で歩いている。

すると赤いレンガで造られた建物が地震でも起きたかのように大きく揺れて崩れ去り、一匹の異形が姿を顕現させた。顔は人間の女性そのものだが、その身体は芋虫のようにブヨブヨとした肉塊その物。

その肉塊同然の身体の周りに数多くの人間の腕がひしめき合っているかと思えば、人間の男性の顔が妖魔の体全身に張り付いている……。この妖魔の名は『百手監獄』。

百の数の手が外側と内部にあり、その肉塊のような身体に獲物を監獄の囚人のように閉じ込め、長い時間をかけて溶かしその溶けた人肉を啜る。はつきり言って恐ろしいものだがナルトは恐れることなく、百手監獄に歩み寄って来た。

『おやおや……わしがここに住み始めて2ヶ月、ここの作業員どもは私に恐れを成してどこかへ消え失せてもう誰も来ないかと思ったら……うまそうな坊やが来たもんだねえ』

彼女……百手監獄はその肉声で言葉を紡ぎ、厭らしく舌を出しながらそう言う。だがナルトはそれを意に介さず挑発的な口調で自分の指を使い頭を叩く仕草を見せ

「アンタ、ここ大丈夫か？ そんな贅肉の付けてたら脳みそまでただの贅肉になっちまうぜ？ ミートババア」

ナルトはそう言った。ミートババアなどと馬鹿にされた百手監獄は激怒するどころか、面白い物でも見たように笑い出し改めてナルトを見据える。

『言ってくれるじゃないかい。それでも私は相手を見る目があつてね……あんたが忍でしかも、かなり出来るってことも十分に分かる。だからこそ……喰いがいるのさッ!』

口を一気に耳まで裂けるほどに大きく開き、鋭い二重にも三重にも連なる鋭い犬歯がナルトを襲う。しかしナルトは苦の一つもない余裕な表情で簡単に避け、背中に装備された一本の大刀『狐月』で百手監獄の身体を斬り裂く。

斬られた際に発生した痛みは電気のように身体全体に巡り百手監獄を苦しませる。だがこの程度でナルトの攻撃は終わらない。ナルトは精神エネルギーと肉体エネルギーで構成された『チャクラ』という力を狐月に注ぎ込み、刀身が赤いチャクラの光を帯び始めた。そしてそれを斬撃として繰り出し放った。

たった一つの放たれた三日月状の赤い斬撃は、百手監獄の顔を始めに斬り裂き、そのまま身体ごと真っ二つに斬り裂いた。

『あああああああああああああああああああ!』

「悪いな。生憎お前の餌になる気ないんだ……
だからそれで勘弁してくれよ。ミートババア」

ナルトが冗談じみたセリフを吐く頃には既に死んでおり、
その身体は茶色の煙となつて蒸発した。彼はその光景を最後まで
見届けると疲れを含んだ溜息を漏らし、その場を後にしていった。

ナンバー1 忍の少年（後書き）

感想待ってます！

設定説明 世界観・妖魔・忍について

よう！ 俺は 妖魔の血 を材料に創られた忍具 紅丸 っていう名で、今はこの物語の主人公

『うずまきナルト』の相棒だ。 ちなみに俺がどんな忍具かっていうと…… まあ、それは次回からの

お楽しみってことにしてくれ。 さて… 俺が現われた理由は作者の奴に『この物語の細かい説明を

してくれ』って頼まれてな。 不本意ながらいつちょ説明してやるぜ。

世界観について

まずこれだな。 里や地名はほとんど原作と変わらないが原作にはない里や村…その他の地名が

何話か出てくるから気をつけてくれ。そしてこの物語の舞台、大帝国『大和』は日本と

同じ形状をしてやがるが、大きさはアメリカ大陸とほぼ同じで『幅』もそれなりにデカイ。

で、この大和っていう国には原作にもある五大国『火の国』『風の国』『水の国』

『土の国』『雷の国』があつて、この五つの大国が大和を支えてくれるおかげで

大和は7000年前から現代に至るまで平和と繁栄が続いてるってワケだ。

そして忘れちゃいけないのが『木の葉ノ里』だ。

基本的にコレも原作と一緒にだが、原作には無いテレビや車がある…

…まあ流石に電車は無いがな。

妖魔について

闇を歩く者　ダークウォーカー、夜を歩く者　ナイトウォーカー、怪物、化け物、

魑魅魍魎、妖怪、魔なる者、古き異形なる者……『妖魔』の二つ名を上げればキリが無いね。

ま、二つ名はともかくとして　妖魔　についてたつぷりと説明してやるから、

ちゃんと見とけよ？

まず　妖魔　がどういった存在かって話だが……率直に説明すると魔を司り

人々を助ける良い奴も奴も少なからずいるが、その大半は残忍で悪徳を好むどうしようもない

馬鹿ばかりだ。だがさっきも言ったとおり妖魔のすべてが悪い奴ばかりじゃない。

良い妖魔で有名なのは『座敷わらし』とか『小豆洗い』、『唐傘お化け』の辺りだろう。

人と共存したり驚かすだけならいいが達の悪い妖魔は娯楽感覚で人間を殺したり、

殺しはしなくても人間を甘美な言葉で騙し、完全な悪人に仕立て上げると

同時にその様子を見て楽しむ……ハッキリ言わせてもらおうが趣味や嗜好が

最悪すぎる。あと妖魔には様々なタイプ型があつてな。

代表的なのが『寄生型』と『妖術タイプ』だな。

寄生型は人間に憑依して寄生した人間を自在に操り、『妖術タイプ』は

妖魔の中でも妖術に特化した奴が該当するな。まあ両方に共通していることは、

邪な妖魔なら達が悪すぎるってことだけだな。

忍について

まあ……これも全然原作と変わっちゃいないな。

ただどれだけ認知されてるのかったのが、原作とこの作品の違いだな。

この作品における忍っていうのは『人知れず妖魔を狩り、人々の平和を影から護る』

存在であって『人知れず』の通り、大半の一般人は存在をまったく知らない。

だが忍の協力者である サポーター と呼ばれる一部の人間は、忍や妖魔の存在を認知している。

また、サポーター以外にも妖魔を召喚使役する『魔術者』っていう輩も

忍と妖魔の存在を熟知してる。

で、この作品の忍は原作同様『チャクラ』っていう精神エネルギーと肉体エネルギーを

合わせた特殊な力を使って『忍術』を行使する。

さて…ここでチャクラの属性について説明をするが大丈夫か？ 大丈夫ならしつかりと見とけよ

まず、チャクラの属性で最も一般的で『始祖属性』と呼ばれているのが『火遁』『風遁』

『水遁』『土遁』『雷遁』の『五大チャクラ属性』であり、

この五つ以外にも『木遁』『晶遁』『氷遁』『磁遁』『溶遁』『灼遁』『塵遁』など、

いろいろな属性があるんだな、これが。

俺が教えられるのは……こんなもんだな。

次回は俺が大活躍する予定だから、楽しんで見て貰えると嬉しいな。

そうじゃあな！ アディオス！！

ナンバー2 ナルトという男／新たなる依頼

木ノ葉の里にある『木ノ葉病院』から3km離れた場所に、ナルトが自営業している

便利屋『波風』はあった。外見は4階建ての小さなビルで事務所は1階にある。

他の階には客人が泊まれる部屋が何個があり、物置の部屋が3、4個あるだけで

素っ気もないしつまらない。そして肝心のナルトはというと……

『キシヤアアアアアアアアアアアアア！！』

『キシヤアアアアアアアアアアアアア！！』

二匹の妖魔の金切り声が木ノ葉の里にある廃墟のビル全体に響き渡り、二匹の前にいた

ナルトは煩そうな表情をするも大刀『狐月』を手に取り、二匹の妖魔『楚一堵 ソード』と

『武霊奴 ブレイド』にその切っ先を向ける。

楚一堵は人型をしているが上半身の皮膚は爬虫類のようで、下半身は両生類特有の皮膚に

似ている。そしてもっとも特徴的なのが頭部だ。頭部はコブラその物で首が異様に長く、

首の両側には大量の短剣に似た刃が付けられ、綺麗に並んでいる。

両腕の半分は鋭い西洋剣のような刃と化し、首同様に長く伸びた尾の先にもソレがある。

武霊奴は顔も身体も人型だが目は血の様に赤く、身体の全身には刺々しい爬虫類に似た皮膚に

覆われている。その手には狐月より大きい幅と長さを持つ大刀が握られている。

『貴様があの　うずまきナルト　か……噂には聞いているぞ』

『武靈奴！　コイツをぶっ殺せば、俺達の株は急上昇間違いないぜ
！』

武靈奴は静かに武人の風格を匂わせながら言うのに対し、楚一堵は
どこか下劣染みた

口調で喋る。その口調がナルトにとって気に入らなかったのか……
わざと挑発口調で

楚一堵に話しかけて来た。

「おいおい……そのコブラ野郎はやれるのか？　いかにも『雑魚キ
ャラ』って感じ

しかしないな。今ならまだ間に合う……お家に帰ってママに甘えて
貰った方がいい」

『テメエエエエエエ！！！！！　こんな状況でそんな口が叩けんな、
アア！？』

「できるさ。今この場にいるのは『雑魚一匹』と『中々の剣豪』が
相手ならな」

『ぎ、雑魚って……お、お、俺の事がアアアアアアアアアアアア
アアアアア！！』

「ああ。やっぱり自覚あったんだな」

ナルトの最後の言葉が、楚一堵の怒りボルテージをMAXにさせ、
彼を突き動かせた。

楚一奴は両腕の剣でナルトを突き刺そうとする。それに対してナル
トは狐月を使い二つの剣の

動きを封じ、それと同時に弾き返す。

そして一気にチャクラを狐月に集めて強力な斬撃の衝撃波を繰り出

す。

衝撃波によって楚一奴の剣は斬り折られ、楚一奴自身も深く挟る様に斬り裂かれる。

激痛と斬られた感触が楚一奴を襲う。紫の鮮血を流す楚一奴に武霊奴がゆっくりと歩み寄り

自分の手に持つ太刀『霊霸豪來』で楚一奴の心臓を突き刺した。

『ガハアアッ！！！！　な…何故だ武霊奴』

『馬鹿者め……よく見る』

『！！　これ…は……』

ナルトによって与えられた斬撃の傷が塞がり、噴出した血が白い煙となって蒸発する。

これが霊霸豪來の持つ能力の一つ……『治癒回復能力』である。

もう助からない程の傷を受けても、その心臓に霊霸豪來の刃を突き刺す事で

どんな傷でも治癒し回復する。しかしこれはあくまで『傷』だけ。

病気や毒を治癒することはできない。

霊覇豪來が持っている唯一のデメリットはまさにそこだろう。

「へえ……その刀、ただのお飾りじゃないんだな」

『そういう貴様の刀もそうであろう？ その刀の名は知っているぞ……『狐月』といい、

ほんの少しチャクラを溜めて開放すれば山は二つに碎け、たったの一振りで一千の妖魔を

滅ぼすと言われている……そんな名刀がよもや貴様の手にあるとは……』

「まあな……不服か？」

『いや。むしろ納得していてな、貴様ほどの武人が持つに相応しいと私は思う』

そういつて武霊奴は霊覇豪來を剣を構え、一氣に走り出す。

ナルトも同時に走り出して互いに剣術を使った攻撃を展開し合う。
ナルトは忍者における剣術

『螺旋剣法』を自分流にアレンジしたモノを使い、武霊奴は様々な妖魔における剣術の一つ

『覇導剣術』を使ってナルトの螺旋剣法に対抗している。

凄まじい剣と剣の激突が空気を振動させ、鋭い衝撃波を生んでいる。

鋭い衝撃波に当たった壁や窓は、まるで巨大な斧にでも斬り裂かれたような痕が残る。

そんな激戦を繰り広げている二人だがこのままやってもキリが無いと互いに悟ったのか、

すぐさま距離を置き互いの刀にチャクラを込め始める……そして一撃必殺の剣撃が繰り出された。

二つのとてつもないエネルギーがぶつかり合い、それに耐え切れなかった廃墟ビルは

瞬く間に崩れ落ちた。崩れ去った後に残るは『静寂』……ただそれだけだったが

ビルの瓦礫の山の一部が崩れて三つの影がその姿を見せた。

1人はうずまきナルト。もう1人は片腕を失くした武霊奴。

最後の1人は武霊奴の刀に助けられた楚一堵。

以上の3名があゝの崩壊から免れていた。だが先程も言ったとおり武霊奴は片腕を失くしてしまい

楚一堵は傷を癒し回復しているといっても、体力的に不利であろう。

となれば……体の調子も万全で掠り傷程度しか負っていないナルトが有利だということになる。

故に武霊奴と楚一堵の二人に緊迫した空気が流れるが、敵であるナルトは……

「はははははははははは！ いいねえ！ お前ら最高だ！ どうだ？」

俺の仲間になつてみないか？ 損はさせないからよ」

『なっ……』

『……言ってる意味が分からんのだが』

「だからよお。俺の仲間になれて言ってるんだよ、理解したか？」

うずまきナルト……これが彼の本質と言えるだろう。

彼は大切な物を守ろうとする強き純粋な心『火の意志』を持つ者を仲間と認め、

そして仲間も彼の『火の意志としての器』に惹かれて彼についていく。

『…………ふっ…なかなか面白い男だな、おもしろい。なってやろう』

「そういつお前も、おもしろいじゃねえかよ」

『ちよっ、おい武靈奴！ 何言ってやがる！ こいつは…………』

『そう気にするな楚一堵。片腕なんて三日もすれば元通りに直るし、こいつは面白い』

「そうだぞ楚一堵…………気にするなって」

『っておい！ 何で軽々しく俺の名前言ってんだ！！ 殺すぞ！』

いつしか戦いはナルトの持ってきた銘酒による飲み会となってしまい、

ちよっとした痴話騒ぎは夜の１１時に始まり、夜は明けるまで続いたらしい…………

翌日・便利屋『波風』事務所

で、結局お前を狙ってきた妖魔二匹を逃がして、お友達になってきた……ってわけかよ

「ああ。確かに妖魔には、たちの悪い連中が多いが『火の意志』一つー真っ直ぐな魂を

持つてる奴等だっていんだよ、これが」

ナルトは高級感を思わせる木製のカウンターテーブルに足を乗つけた態勢で座っており、

昨日の様子を机の上に置いてある自分の相棒であり、ブレスレッド型の忍具である

『紅丸』に話していた。

はあああ…… お前とはお前がガキの頃からの付き合いだがよオ、

そーいうところは全然変わってないな。そこがお前のいい所であり、魅力的な部分だな

「野郎に魅力的なんて言われても嬉しくねえよ。言われるなら別嬪さんがいいな」

女運が悪いのか？

「うるせーよ……」

ジリリリリリリリリ！ ガチャッ

「はい、便利屋『波風』ですが用件は？」

ナルトは電話を耳にあてそう言い、相手の返事をもつ。

返事はすぐにでた。相手は声からして女性だろう。ナルトは暫らくの間

電話の相手と話を続け、話が終わったのか電話を切って紅丸を左手の手首に付ける。

どうやら『怪奇の依頼』のようだ。

怪奇の依頼……か。今回は大物の予感か？

「ああ。ビンビンと感じる……間違いなく大物だ」

そんな第六感的なもの、あてになるのか？

「あてになるさ……俺の勘だからな！」

ナルトはいつもの格好（原作と同じ）で大刀『狐月』を背中に装備し、車庫に置いてあった

小型ジェットエンジン付きのバイクに跨り、エンジンをかける。

「さあ……楽しい祭りの始まりだ、派手に行くぜ！」

一気に速度を上げ、黒い煙を出しながら木ノ葉の里を駆けていった…

……

ナンバー3 現われた炎獄の覇者／ミズチ討伐ノ依頼（前書き）

遅くなってすみません（汗）

では、どうぞ！

ナンバー3 現われた炎獄の覇者／ミズチ討伐ノ依頼

そこは木ノ葉の里から56km離れた地点にある炭鉱場。

あの『百手監獄』を倒した炭鉱場とは違い、こっちは荒れ果て無人の廃墟となっている。

そんな場所を1人…ナルトは歩いていた。

何故こんな所に来たのか、それは他ならぬ先程の電話の主がここを集合場所に指定したからだ。

しかし人の気配が無さ過ぎるところを見るとまだ来ていないようだが、代わりに妖魔の団体が

来ており、殺気をナルトに投げ付けまくっている。

姿は俗に言う死神のような風貌で身体は骨だけではなく辛うじて肉が付いているが、

かなり痩せ細り死人も同然だ。死神に似たこの妖魔は文字通り死神ではあるが、神界において

死神としてのルールを破り妖魔の世界『魔境』へと追放された『堕
天死神』である。

と言ってもその力は低いのでランクで言えばDかCのいずれかだろ
う。

しかし堕天死神には上級。中級。下級。この三つに分かれている為、
こいつらの実力はもつと向上するだろう。

尤も…ナルトに武器である『死の短刀 デスサイズ』を向け、殺
そうと飛びかかった時点で
それはもう叶わないだろう……

ウオオオオツツ!!

ハアアツ!!!

2体の堕天死神が自らの持つ短刀を振り回してナルトに飛びかかる。
ナルトはそれを後方へジャンプすることによって回避し、背に装備

した大刀『狐月』で

2体を横に切り裂く。切り裂かれた堕天死神は瞬時に灰と化しその光景に他の仲間達が驚愕する。

全部で76もいた堕天死神はこれで74となり、2体の仲間が一瞬の内に倒されたことで

迂闊には出れなくなっていた。するとナルトは狐月を持ちながら肩に置いてもう一つの手で

指をクイッと動かし挑発的な態度をとる。

「かかってこいよ……雑魚の蛆虫！」

！！ キシャアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

一匹の堕天死神が挑発に乗ってナルトに襲いかかろうとし、それに続いて他の堕天死神が

ナルトに向かい襲いかかる。敵の数は74。普通なら勝てないがナルトは違う……懐から一丁の

銃器『疾風』を取り出す。一見するとただのハンドガンに見えるが

その色は緑と黄の二色で

銃口から撃ち出す弾丸は鉛でできたものではなく、ナルトの自身の持つ必殺忍術『螺旋丸』を

銃弾状にした通称『螺旋弾』を射出して敵を射抜く。通常、いかなるランクが下位の妖魔でも

人間の武器で殺す事はできない。妖魔を殺すには『チャクラ』を使用した忍術か、もしくは

神の力が宿った『聖遺物 ホーリー・ロストロギア』でしか妖魔は殺せない。

だからこそ普通の弾ではなく『螺旋弾』を使うのだ。

それにメリットもある。螺旋弾の材料は自分自身のチャクラで、たった微量で55個の

螺旋弾の生成が可能……弾切れの心配はないし、何より雑魚妖魔を一掃できる。

「ハッハ！ どうした！ その程度かお前等は……！」

アアアアアアアアアアアアアアッ！！

ガアアアアッ！！？

ブハアアッ！

ガアアアアアアアッ！！？

次々と螺旋弾の餌食となっていく堕天死神たち。弾の猛攻は止まらず襲いかかって来る敵を

食い潰していく……そして最後に残るのは築き上げられた灰の山であり、

灰自体に生命は感じられない。何故ならこの灰は『堕天死神』の屍なのだから……

そしてとうとう最後の一匹となってしまった堕天死神の団体。

もはや壊滅に等しく、最後の一匹以外誰もいない。

と思っていたナルトだったが、上空から妖魔の気配を感じ改めて上を見る。

上には空が広がっているだけだが妙な黒い点があり、それは勢いを増して落下していると同時に

火炎で構成された砲弾を無数に撃って来た。

ナルトは狐月で火炎の砲弾を斬り捨てて防いでいく。

そうしている内に黒い点だったモノが墮天死神の後ろに着地し、その姿が顕となる……それは

一匹の巨大な狼だった。狼といっても頭は普通だが身体全体に鉱物化した岩のような皮膚を

身に纏い、多少の亀裂のようなモノが見られる。

その亀裂のようなモノからは炎が溢れ出てマグマが走っており、まさに『灼熱地獄の番犬』

というに相応しい風貌だ。しばらくして炎の狼は生き残った墮天死神を見つけると

顔を近づけてじっくりと観察する。一方の墮天死神は殺されるという恐怖で指の一本も

動かせないでいたが、炎の狼がゆっくりと笑い墮天死神に問いを投げ掛ける。

「ふむ……気に入った。貴様を我が『眷属』にしてやるう」

そういつて炎の狼は口から大量のマグマを吐き出し、マグマが墮天死神を容赦なく呑み込む。

しばらく断末魔の叫びが辺りに響き渡るが、マグマが消え去ると同時に『眷属』となった

墮天死神が姿を顕にした。死人のように痩せ細っていた肉体は業火へと姿を変え、

身に纏っていた黒いフード状のマントは紅蓮の色へと変わり、持っていた短刀は

炎を身に纏った長刀へと姿を変えた。

グオオオオオオオオオオオオアアアアアア
アアアアア！！

産声の叫びが空気を熱く滾らせ、それが熱風となってナルトに襲い

かかるも

ナルトは意に介さず炎の狼へと近寄り

「ハアアツツ!!」

いきなり斬りかかった。

炎の狼はダメージこそ無いが、かなりの衝撃を感じてナルトのいる後ろへと振り返った。

『いきなり斬ってかかるとは……貴様、そんなに死に急ぎたいか?』

「生憎。無視されるのが嫌な性質タチなんだ、俺はな……というよりソイツは俺が

狩る予定だったんだが……邪魔するのは礼儀がなっていないぜ?」

『ハッ! 貴様の都合など我には関係ない……そもそも我は貴様を殺す為に来たのだ。』

こいつはその 道具 として我が眷属にしたまでのこと、人間風情が口答えるな!!』

炎の狼の口から無数の火炎砲弾が発射される。

先程の時と同じモノだがさっきのに比べ威力が増している。それでもナルトは簡単に

回避し、残った火炎砲弾をチャージして大きくさせた螺旋弾で撃ち抜き、相殺させた。

それを見た炎の狼は高らかに叫んだ。

「ガッハツハツハツハツハ！　いいだろう小僧！　貴様のその強さを称え我が名を

教え奉ろう！ 我が名は『炎狼我王』！ 魔境の2億という熱さが支配する大地『炎獄』の

覇者なるぞ！
㊦

「いいねえ！ だったら俺も名乗ろうか……俺の名前は『うずまき』」

ナルト』。

しがない『便利屋』であり、1人の『忍』だ！」

瞬間。炎狼我王の業火を纏った爪がナルトに襲いかかるが、ナルトは狐月で防ぎ、弾き返す。

そして狐月に自分のチャクラを一定量に流し込み強力な斬撃を放つ。しかし炎狼我王はその一撃を

受けて尚、涼しい顔をかましていた。その理由は彼自身を覆う鉱物化した岩石の皮膚が紡ぎ出す

圧倒的な防御力にある。彼がこの世に生を受けて4000年……その間に『九尾』と『朱天堂璽』

以外に、この防御力を破った者はいない。それにいくら九尾と天堂璽が炎狼我王の防御力を

破ったと言ってもそれはあくまで全身全霊をかけての攻撃をしたからであり、彼等もその防御力を

破るのに大いに苦戦したのだ。そんな不屈の化け物を相手にナルトは勝つ事ができるだろうか？

正直ナルト自身、そう思った時だった。

「何やってんのよ、ナルト！」

少女の声がナルトの耳に入り脳へと送られる。

脳内で声が一体誰の者か考えた結果、一つの答えが瞬時に浮かび上がった。

「『イノ』か……っつーか、もしかして……電話で俺が話してた依頼主って……」

「ご明察の通り、私よ。久し振りねナルト」

ナルトの前に現われた人物。それはクリーム色の長い髪に翡翠色の眼が特徴の少女『イノ』。

ナルトの幼馴染であり、忍の名門『山中家』の次期当主でもある。

そしてどうやら、あの時ナルトが話をしていた向こうの依頼主の正体は『イノ』だったようだ。

意外な事実にはナルトは溜息を吐き、改めて炎狼我王を見た。

何とも律儀な事に炎狼我王は待っていてくれており、その眷属であり従属でもある堕天死神……いや、

『デスフレイム』も炎狼我王の命令が無いので待機したままで、静かに佇んでいた。

『すまぬが……今我が協定を結んでいる者から撤退の命が下った。

そもそも我がお前を殺そうとしたのも、その『協定者』の依頼でな……まったく優柔不断な

協定者で我も困っている。まあそんな訳でこの場は引かせて貰うが次に会った時は覚悟しておけ』

炎狼我王とデスフレイムは、突如として地面から湧き出たマグマに呑み込まれ、

その場から消え去った。

「で、いろいろとありはしたが…お前が依頼するなんて珍しいな。何かあったのか？」

「まあね。私がアンタに依頼したい事は『水霊の討伐』よ」

あれから僅か2分で何事も無かったかのように依頼の話をするナルトに、イノも何事も無かった

かのように話をする。イノがナルトに申し込んだ依頼内容は『ある湖に潜む水霊 ミズチ の抹殺』

だが、ここで『水霊 ミズチ』という妖魔について説明しておこ

う。

水霊 ミズチ とは、蛇の姿をした妖魔で二つのタイプがある。

一つは妖魔における種族『魔族』における水霊のタイプと怨念を抱いた人間が何らかの理由で

溺死し、魔境から漏れ出したチャクラが残留した妖魔のチャクラで水霊となるタイプが存在する。

前者のタイプは危害を加えない限り人間に危害を及ぼすことはないが、後者のタイプは生きた

人間の血肉を求め、自らのテリトリーに入ってきた人間を容赦なく捕食する………今回ナルトが

退治することになる水霊は後者のタイプでしかも、人間の血肉を喰うだけでなく喰った人間が

元から持っていた負の念も喰らい、その力を強めていたようで通常の後者タイプの水霊と違い

尤も性質が悪いらしい。そこですべての忍の拠点とも言える巨大組織にして中枢でもある

『暁』がこの水霊討伐を山中家に任命したのだ。この判断については間違っていない。

イノを含める山中家は『心転身』という精神忍術に長けており、相手の精神へと入り込み

その精神に潜む様々な負の感情を浄化することができる。これならば水霊の力の大半となっている

負の感情で創り出される力『怨負力』をなくし、水霊を討伐することができる。

そこまで事情を説明したイノは喋り疲れたばかりに溜息を吐き、改めてナルトを見る。

「OK、大体の事は分かった。だが何で俺に協力を？」

「いくら水霊の力の大半を消したからって、私の実力じゃ水霊を倒すのはまだ無理なの。」

それなら中々の実績とそれ相応の強さを持つてるナルトが必要なのだ

「なるほどね。よく分かった……で、その水霊が潜んでる湖は一体どこなんだ？」

「波の国にある『千襦湖』って湖よ。毎年そこで大勢の人達が行方不明になっているの」

「ってことは…今その湖には誰も近付いてないのか？」

特定の場所で沢山の人が行方不明になったり、変死していたら噂という情報が

一気に人里に広がり、誰も近寄ったりはしないもの……それが普通なのだがイノは

その問いに首を横に振る。

「それが悪い噂が立ってるっていうのに、その湖にいく人が後を絶たないのよ。」

しかも行った人は戻ってこないし、生きて帰った人も『自分でも何であの湖に来たのか分からない』

って言って、ひどく精神不安定な状態になってるの」

「『自分でも分からずに来た』………水霊が幻術か何かを使っただけのことか？」

「多分そうでしょうね。二つのタイプの水霊に共通するのは『幻術を使用できる』って点よ」

幻術……これは忍術や体術ではなく、幻まぼろしを使った術式である。

忍での主な用途は敵の動きを封じ精神的ダメージを与えたり、敵がもっている様々な情報を

聞き出すなどの為に使われる。自分が討伐しようとしてい水霊にそのような術式が

使えるのなら更に厄介であろう。

「ま、とにかく行ってみるしかないだろうな……水霊について作戦とか

いろいろ考えるのはそれからだ」

「そうね……じゃ、行きましようか」

ナルトは自分が持ってきたバイクに跨るとその後ろにイノが跨り、二人を乗せたバイクは

炭鉱場を去り、そのまま波の国にある『千襦湖』へと向かった。

一方その頃。とある洞窟へとやって来た炎狼我王は筋肉質の肉体を持ち、

紅蓮の髪をオールバックにさせた人間の男へと姿を変え、その格好は黄色いシャツに

赤い長ズボンというラフなものだった。

炎狼我王は洞窟の奥へと進み、やがて広い空間へ出ると待ってまし

た言わんばかりに

1人の男が両腕を広げ笑みを浮かべていた。

「待っていましたよ！ 炎狼我王さん……わざわざ『うずまきナルト』の始末を頼んでおいて

呼び出すという身勝手な行為を許して下さい。ちょっと厄介なことになりましたね」

男は長い黒髪にそれと同じ色のスーツを身に纏った格好をしており、男がサツと右手を上げると

白く丸い形状の靄のようなモノが現われ、それがスクリーンのように『あるモノ』を映し出した。

「……なるほど。我を呼び出した理由はコレか……」

「ええ。そうです。ここ最近、私の部下を使って『人殺し』をさせていたんですよ……人間の

『魂』と『負怨力』を大量に集める為に……ね」

「しかし何故そのような事を？ お前の目的はこの大和という列島に奔る霊脈であるのだろうか？」

「ええ、その通りです……しかしながら私の肉体はこの『右腕』だけ……」

「うむ。なるほど……霊脈を手に入れても、その霊脈の力を入れる『器』となる肉体」が

無ければ意味がない。という事であろう？」

炎狼我王の言葉に男は首を縦に振る。

「私の肉体の『完全復活』の為、我が部下に肉体の材料となる人の『魂』と『負怨力』を

集めさせていたのに……まさかこんな邪魔が入るとは思いませんでした」

そう言つて男は白い靄のようなモノを見る。そこに映っていたモノ……それは忍の中枢大組織

『暁』に所属している各大組織の上役たち7名が集まり、何やら会議をしている様子だった。

「『暁』が異変に気付いてSランクを超える『SSランク』の上役たちを集結させるとは……」

これは本当に予想外でした。ならば、私達が出る行動は二つ……いつも以上に行動を隠密化するか

もしくは……各大組織を一個ずつ潰しにかかるか、となってしまうですね」

「ガッハッハッハッハ！ 面白い！ だったら我は一個ずつ潰しにかかる方を選ぶ！

あの上役どもとは一度戦つてみたかったモノでな……これは楽しい『戦争』になりそうだ」

「丁度良かった、私もそう思っていた所です……しかし秘密裏かつ隠密に事を運ばすのも

大事です。ならば話は簡単……『一手に別れて』行動すればいい……」

男はそう言つと白い靄のようなモノに映つた上役たちを見て、狂気を含んだ笑みを浮かべた。

だがその笑みには狂気だけでなく、凄まじい殺意と憎悪があつた事を……隣にいた炎狼我王が

気付くことはなかった………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9697x/>

NARUTO妖忍伝 あやかしにんでん 百鬼殺しノ巻

2011年11月4日04時34分発行